

# 古墳時代村落と石製模造品

● 早野浩二

本文は、村落研究における石製模造品の学史的・今日的な研究状況における位置を確かめるものである。1970年代、村落における石製模造品は、村落祭祀の研究とも関係しつつ、観念の段階的相違、イデオロギー統制の史的前提を示す祭祀具として扱われる傾向にあった。1980年代、村落における民俗的祭祀としての位置も示されたが、1980年代末年以降、村落祭祀の枠組みにおける石製模造品の位置は必ずしも適確には示されなかった。こうした学史的経緯を踏まえ、さらに特徴的な村落や古墳における石製模造品の存在形態を例示しつつ、石製模造品が村落祭祀に付随し、外来思想にも触発されながら、地域開発、生産力発展を観念させる装置として機能したことを推考した。そして、石製模造品を村落祭祀が発展し、形骸化する過程の端緒とした。

## はじめに

先に石製模造品について、愛知県内を対象とした集成を試み、集落出土資料を中心とした編年的考察を提示した（早野2006）。これによって集落出土の石製模造品についての個別実証的な側面については、一定の見通しが得られたと思われる。一方、石製模造品の集落における保有形態の問題、例えば、かつて高橋一夫（高橋1971）が提起した個別家族の自立化の問題等については、今後の検討課題とした。

さて、前者の側面については、各地域、各種の石製模造品を対象とした研究は数多く、一定の研究水準に達していると思われるが、後者の側面について、その問題意識を継承しようとした研究は決して多くはない。本文は、後者の側面を論じる前提として、古墳時代村落\*における石製模造品の存在形態について、研究の流れを追い、その視角を具体的事例を通じて、今日的な研究状況に照らすことを第一義の目的とする。そして、それを踏まえて、社会構成史上、あるいは村落祭祀の展開過程における石製模造品の位置を改めて確かめることとしたい。

\* 本文中には「集落」と「村落」の語が混在するが、主として「村落」の語を使用し、文脈に応じて適宜、「集落」の語を併用する。「村落」の語については、義江彰夫に倣い、「律令郷里制に組織されえない在地の基礎的な結合体」（義江1972）という程度の意味合いにおいて使用する。

## 研究の回顧

### （1）1970年代の研究

1970年代における代表的な研究として、原島礼二（原島1971）、高橋一夫（高橋1971・1975）の論説がある。両者の研究は、主に関東地方の村落を対象として、前者が大家族別生産形態、後者が家父長制的世帯共同体の成立を論じたものである。

原島は、『常陸国風土記』行方郡条の一節にある箭括氏麻多智の開発伝承を手がかりとして、7世紀以前における開発形態や労働編成、大家族別支配形態の成立を論じた（原島1971）。その過程で、石製模造品等の各種祭祀関係模造品は、支配集団のイデオロギーを反映し、5世紀後半に深刻化していた支配形態の矛盾を解消する手段として、支配集団から農業共同体に分枝されたとした。そして、箭括氏麻多智のような小開発主体が夜刀の神といった自然神を独自に社に祭ることによって、模造祭器に象徴される伝統的支配イデオロギーが克服されたと述べている。また原島は、箭括氏麻多智のような小開発主体が6世紀の群集小古墳の被葬者としてふさわしいとする。

高橋一夫は石製模造品の堅穴住居における出土状況から、家父長制的世帯共同体の確立する過程を論じた（高橋1971）。高橋は、原島と同

様、剣・玉・鏡を模した石製模造品を、支配集団のイデオロギーを表象した農耕祭祀用具として、それが鬼高Ⅱ式期（6世紀後半）に減少する原因を、開発による地縁的な村落形成とそれに伴う村社の発生に求めた（高橋1975）。後者の論説で高橋は、原島の石製模造品に対する見解について、人口の増減、カマドの生産と波及の論点から疑問を呈するが、石製模造品に表象される従来の支配イデオロギーが、地縁的な村落の形成に伴う（箭括氏麻多智の開発にみられる自然神を祭る）村社に転化したとする点においては、原島の論説にも通じている。

原島が大家族別生産形態、あるいは高橋が家父長制的世帯共同体の成立を論じる過程において、石製模造品がイデオロギー的な側面から重視された背景には、ほぼ同じ時期に、箭括氏麻多智の開発伝承と「令集解儀制令春時祭田条」を主たる対象として、河音能平（1970）、義江彰夫（1972）、沼田武彦（1979）らが村落祭祀の研究を積極的に展開していたこととも密接な関係がある。特に義江は、岡田精司による中央の祈年祭の研究（岡田1970）を参照しつつ、春秋二時の予祝・収穫祭の一方の春時祭田が、公出挙制として組織される過程を明らかにした。つまり、1970年代における研究は総じて、村落の開発形態における観念の段階的相違、共同体慣行としての村落祭祀を通じた祭祀イデオロギーが統制される史的前提をめぐる議論と密接に関わっていた。

折しも、剣・玉・鏡を模した石製模造品については、祭祀遺跡と古墳における組成の異同から、「葬と祭の分化」が小出義治（小出1966）や杉山林継（杉山1972）によって論じられ、研究の一つの方向性が定まりつつあった。

## （2）1980年代の研究

1980年代は、「古代の祭祀と信仰」と題した国立歴史民俗博物館による共同研究を契機として、石製模造品の研究が大きく進展した。この背景には、1970年代までの葬と祭の分化に対する議論をより実証的な側面から検証しようとする機運があった。その代表的な研究が、白石太一郎による古墳副葬品を中心とした石製模造品の実証的研究（白石1985）である。白石はこの論説を通じて、祖霊と神霊は古くから同一

視されていなかったとする立場を表明した。

村落における石製模造品の存在形態については、寺沢知子による若干の論及がある（寺沢1986）。寺沢は、石製模造品による祭祀行為が古墳と集落では関連性に乏しく、独占される性格のものではないことを踏まえ、それが伝統的な「単位集団」によって担われたものと理解した。そして、古墳時代後期における「家父長制」の存在について否定的な見解を示し、単位集団が解体されるに及んで、石製模造品による祭祀も払拭されたとする。

前節でも述べたように、1970年代における原島や高橋の論説において、鏡・剣・玉の三種を模した石製模造品は、前期古墳の副葬品や沖ノ島祭祀遺跡の依代に共通する支配集団のイデオロギーであることが前提とされていた。寺沢知子も集落における滑石製品を使用する祭祀について、有孔円板・玉・剣の組合せは、前期古墳にみる実物の鏡・玉・剣を用いた首長による儀礼に共通するとしている（寺沢1986）。つまり、1970年代から1980年代にかけて、このような石製模造品のイデオロギー的な側面に対する前提はかなり定着していたとみてよい。

しかし、岩崎卓也は、鏡・剣・玉の三種の組合せに早くから特別な意識が作用していたことに疑問を呈し、三種の石製模造品と前期古墳の副葬品との直接的な関係を否定した（岩崎1986）。また、三種の石製模造品は、自然神を祭る民俗的祭祀に端を発するもので、「民俗的祭器」としての石製模造品の扱いには、地域独自の解釈が加わる余地があることをも示唆した（岩崎1987）。

さらに進んで岩崎は、記紀神話や王権祭式が体系化される過程において、民間信仰や地方的霊格を組み入れつつ、儀礼的統合が多く行われたこと（松前1974）と軌を一にしつつ、民俗的祭祀に端を発する三種の宝器が、『記紀』編纂の時期に三種の神宝として王権に定着したことを推考している（岩崎1987）。この推考は、義江彰夫が、律令国家の祈年祭の方式を共同体慣行としての村落祭祀の方式を変質させながら組み込んだものと示唆したこと（義江1972）とも脈を通じるもので、本文における議論の本質とも深く関係する。

一方、1970年代の村落祭祀の研究を受けて吉田晶は、村落首長と祭祀の関係を論じ、村落首長を6世紀代の個別経営が求めるイデオロギーを体現する存在として、それ以前の首長霊を体現する人格神であったとする古墳の被葬者と対比した(吉田1980)。つまり、この時期の村落祭祀の研究においても、支配集団のイデオロギーの交替が強く意識されていることは明らかである。一方、大町健は、計画村落の形成、村落祭祀の掌握に村落首長の主体性を強調した論を展開している(大町1986)。

1980年代においては、石製模造品自体についての個別実証的な研究が深化した一方、村落における位置が積極的に論じられることはなかった。また、石製模造品のイデオロギー的な側面に対する研究によって、鏡・剣・玉の三種を模した石製模造品が支配集団のイデオロギーであるとする無批判な前提が容認されないことも示された。つまり、これら石製模造品の個別実証的な研究、イデオロギー的な側面に対する研究の動向を集約しつつ、石製模造品を媒介とした村落研究を再構成する努力が求められることが理解される。

### (3) 1980年代末年以降の研究

1980年代末年以降、集落遺跡の大規模調査が継続的に実施されたこともあって、石製模造品と大量の土器群が一括して出土する事例が目されるようになった。これらの事例は「集落内祭祀」を連想させることから、石製模造品と村落祭祀についての研究に新たな視角を提供することともなった。

こうした事例を通じて出原恵三は、在地における生産力の発展に照応した祭祀形態の変化を祭祀空間と祭祀遺物の構成から追求した(出原1990)。そして、5世紀後半に祭祀遺物と日常什器をそれぞれ多用する祭祀に祭祀形態が分離し、後者の祭祀形態が春時祭田の祭祀に系譜的につながることを説いた。また、出原は、イデオロギー支配の側面を中央の政治統合過程に結び付ける傾向に対して否定的な立場を表明している。この出原の論説は、律令国家が村落の春時祭田を含む在地の祭祀方式を変質させながら統制に組み入れたとする義江彰夫の示唆(義江1972)に同調しつつ、祭祀方式の変化における

在地の主体性を重視したものである。

古墳時代後期の千葉県成田市中岫第1遺跡(南羽鳥遺跡群)の「土器集積型祭祀遺構」を詳細に分析した高橋誠は、同遺構を春時祭田のような儀礼的饗宴の痕跡と理解し、祭祀遺構に模造品(雛形品)や製作残滓としての鉄片を含めた鉄製品(鉄鏃、鉄鎌、鉄刀子、鋤先、釣針等)を伴うことを踏まえ、それにかかる儀礼を生産・開発を高揚させる行為として想定した(高橋1999)。また、その祭祀を管掌したのは箭括氏麻多智のような人物で、南羽鳥古墳群の被葬者こそがふさわしいとした。

1980年代末年以降、大量の土器群が出土する祭祀遺構の類型化を踏まえて、春時祭田のような村落祭祀を想起する考察も提示されるようになった。しかし、出原や高橋の考察において、祭祀遺構を類型化する指標は必ずしも明確ではない。また、祭祀に供されたとみられる大量の土器群を春時祭田のような村落祭祀の痕跡に対比することを否定するものではないが、安易な対比に結するのみでは、村落祭祀の歴史性そのものを曖昧にしかねない。

一方、集落から出土する石製模造品を、鏡・剣・玉の組合せの呪力、あるいはその画一性を根拠として、政治性を帯びた器物とする論調も依然として少なくない(桜井1990、後神1993、鶴間2007など)。このように異なった前提に依拠して議論が重ねられていることは、この分野における研究基盤の整備、認識の共有が十分でないことをよく示している。

### (4) 研究の現状

かつて村落研究において石製模造品が論じられるに際しては、観念の段階的相違を明確化することによって、家父長制的世帯共同体の成立を展望する論調が支配的であった。そして、これらの論調は、石製模造品が支配者集団のイデオロギーの産物であることを前提としていた。しかし、この前提に対して、無批判な態度が許されないことは先に述べた通りである。加えて、この前提は、古墳時代中期に首長の司祭者的側面が薄れていたとする大局的な理解とも相容れない。一方、律令期の村落祭祀の研究に配慮しつつ、古墳時代の村落祭祀に春時祭田のような祭祀を想定する向きに対しては、逆に観念の段



階的相違を不鮮明化させ、結果として、村落祭祀、家父長制的世帯共同体の歴史性を平板化する危惧さえ抱かれることを述べた。

このような研究の現状から、古墳時代における家父長的世帯共同体の析出、段階的な成長過程をイデオロギーの側面から追求することの困難さが改めて認識される。ひいては、家父長制的世帯共同体を重要な術語としてきた村落祭祀の研究についての議論も再点検が必要となる。また、考古学、文献史学を通じた村落祭祀の研究としても、各論は政治性を重視する傾向と、村落の主体性を重視する傾向に大きく二分され、両者の認識の隔たりは決して小さくない。

このような研究の流れと現状を踏まえ、以下、具体的事例の検討を通じて、この問題の周辺に立ち入りたい。

## 石製模造品、村落祭祀と村落首長

### (1) 神明遺跡 SX201 と三味線塚古墳

愛知県豊田市神明遺跡は、古墳時代中期を中心とする集落遺跡で、矢作川中流域右岸の中位段丘面上に立地する(図1)。神明遺跡においては、土師器と須恵器によって構成される土器群、石製模造品、鉄製品が共存する特徴的な祭祀遺構が検出されている。

祭祀遺構とされるSX201は、弥生時代後期

の竪穴住居(SB205)廃絶後の窪地を利用した遺構で、遺構を再加工した痕跡は認められない(図2左下)。SB205の計測値は、長軸6.63m、短軸4.99m、検出面からの深さ0.32mである。遺構の中央付近では、ほぼ完形の甕8個体に土器が折り重なるようにして出土し、甕内部には高杯や炭化桃核が入っていた。また、ほぼ完形の甕を除いた多くの土器は、破損した破片が投棄されたような状態で出土したという。遺構の帰属時期は、出土した土器から、TK23型式期とされる。出土遺物は、大量の土器(破片数で土師器19804点、須恵器175点)、石製模造品として、有孔円板1点、白玉65点、鉄製品等として、鉄鏃1点、小型の石突様の鉄製品2点\*、板状・棒状の鉄製品と小さく生成した鍛冶滓、その他、ガラス小玉2点、炭化桃核15点によって構成される(図2-1~80)。鉄鏃(同69)は圭頭式で、重厚な作りを特徴とする導入期の典型的な長頸鏃である。板状の鉄製品(同72)は、形状や大きさ等の特徴から、鉄鋌とその裁断片と理解して差し支えないと思われる。小型の石突様の鉄製品(同70・71)は、裁断した鉄板を折り曲げて閉じ寄せただけの簡便な製作による非実用品である。SB235からは、小型の石突様の鉄製品と同様、裁断した鉄板を折り曲げて製作した、非実用品としての斧形の小型鉄製農工具\*\*1点(同81)が出土していることから、神明遺跡では、鉄鋌を素材としてこれら非実用の鉄製品が製作されたとみられる。

その神明遺跡に近接して三味線塚古墳(図3左)が立地する。三味線塚古墳は、径約29mの円墳で、葺石、埴輪等の外表施設は認められない。埋葬施設は、長軸5.11m、短軸2.26~1.85mの長方形の墓壇に設置された全長4.85mの粘土槨で、粘土槨内には割竹形木棺が納め

\*この小型の石突様の鉄製品について、以前、「鉄鐸」として扱ったことがある(早野2008)。しかし、これに類似する草刈遺跡(草刈六之台遺跡)849号住居において出土した「小型石突」(後述)が木製の柄を装着していることから、「鉄鐸」とする認識を改め、「小型の石突様の鉄製品」とした。いずれにしても、これらは、「裁断した鉄板を折り曲げて閉じ寄せただけの簡便な製作による非実用品」で、遺跡において鉄鋌を素材として非実用品としての鉄製品が製作されたことに対する評価に変わりはない。

\*\*小型の非実用の鉄製農工具については、多くの用語が用いられているが、ここでは、坂靖の専論(坂2005)に倣い、原則として「小型鉄製農工具」とした。

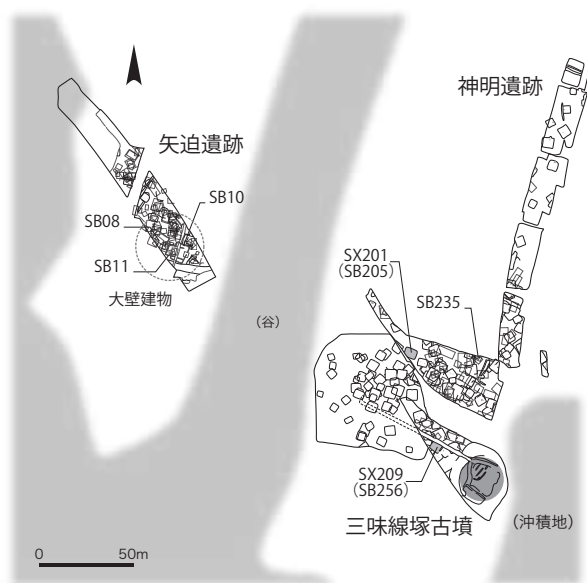


図1 神明遺跡他の遺構配置

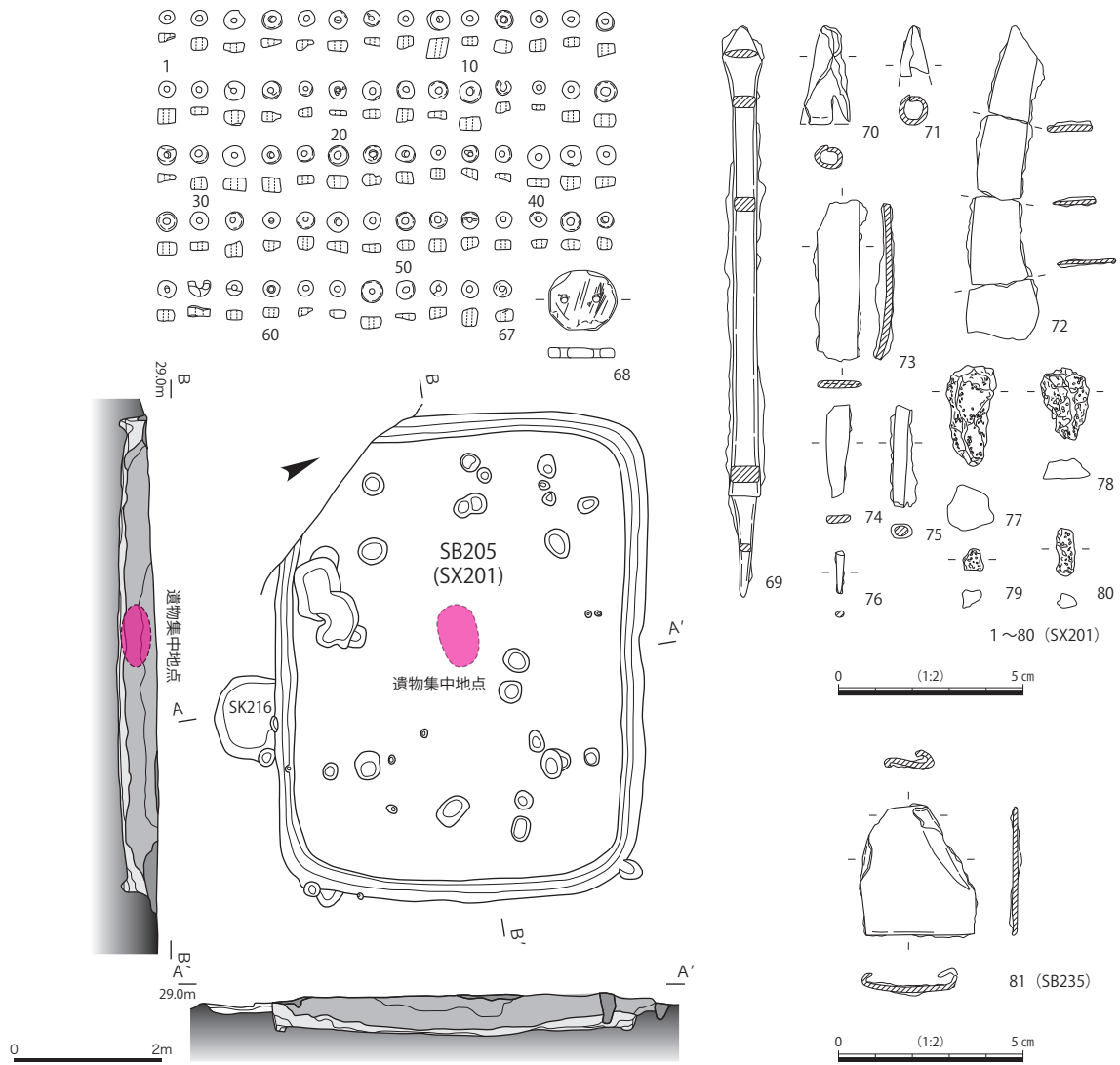


図2 神明遺跡の遺構と遺物

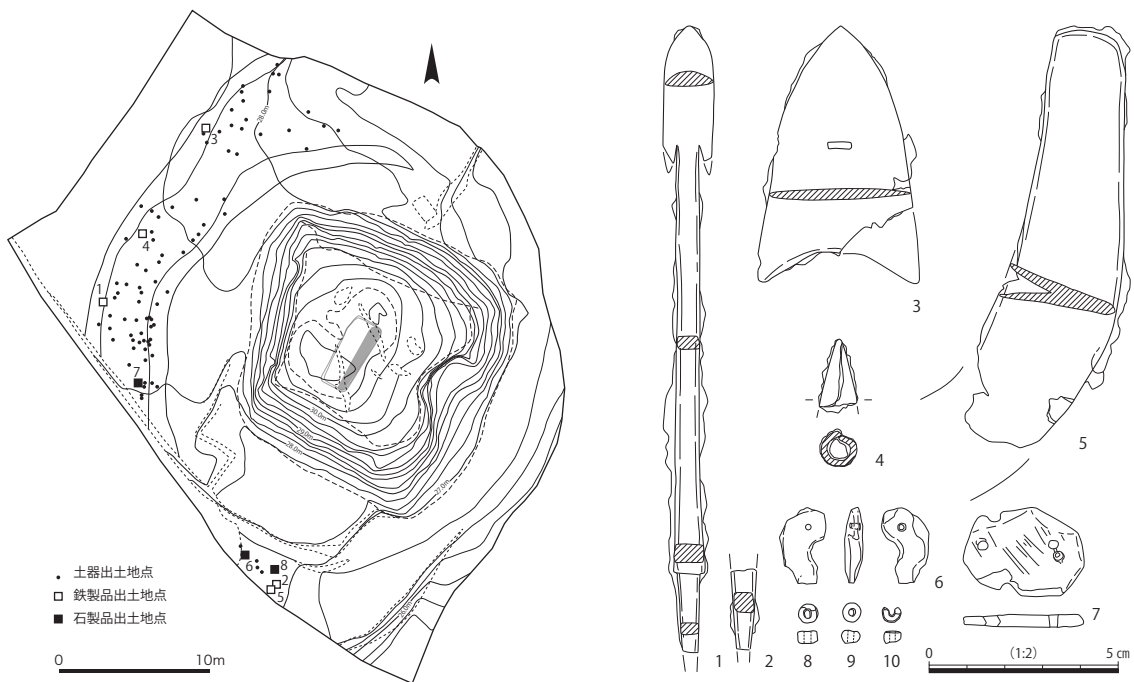


図3 三味線塚古墳と周溝出土遺物

られていたと推定される。未盗掘の埋葬施設からは、鉄鏃1点と炭化桃核、墳頂部からは、緑色凝灰岩製管玉1点が出土した。周溝からは、土師器と須恵器、石製模造品として、有孔円板・勾玉各1点、白玉3点に加えて、鉄製品として、鉄鏃3点、U字形鋤鋤先1点と、(神明遺跡SX201と同様の)小型の石突様の鉄製品1点が出土している(図3-1~10)。出土した鉄鏃は、逆刺を有する柳葉式(同1)、無茎三角形式(同3)等で、前者は重厚な作りを特徴とする導入期の典型的な長頸鏃である。なお、周溝出土遺物は、TK216型式期に相当するものが多い。

神明遺跡SX201と三味線塚古墳周溝には、石製模造品、導入期の長頸鏃、小型の石突様の鉄製品、といった相互に共通する同時期の遺物が組成する。つまり、双方の遺物組成には緊密な連関が認められる。神明遺跡SX201と三味線塚古墳周溝において出土した須恵器に接合関係を有する個体があることも、神明遺跡の祭祀遺構と三味線塚古墳の緊密な連関を傍証する。同時に、これらの遺物群には、鉄鏃など、古墳の副葬品として組成する品目も含まれることも確認される。

## (2) 古墳周辺の石製模造品と村落祭祀

さて、神明遺跡SX201において出土した土器群は、土器の内部に炭化桃核が遺存していたことが端的に示すように、食物(飲食物)供献儀礼に際して使用されたと考えられる。食物供献儀礼は、農耕儀礼を継承した伝統的な儀礼で(岡田1970)、それに伴う有孔円板等の石製模造品は、民俗的祭祀に端を発し、自然神祭祀の場で定着したもの(岩崎1987)とする評価に従えば、神明遺跡SX201は、集落内における伝統的・民俗的な儀礼の痕跡として把握される。

とするなら、神明遺跡SX201と緊密な関係が推測される三味線塚古墳の被葬者を、村落祭祀にも深く関係した村落首長に擬することもそれほど不当ではないと思われる。その三味線塚古墳の被葬者は、5世紀後半に活発化する神明遺跡周辺の開発を主導したことは容易に想像され、神明遺跡の祭祀遺構と三味線塚古墳の相互において出土する石製模造品は、自然神を信仰の対象として、開発を支える観念的支柱として機能したことも想像される。

杉山林継は、陪塚と古墳の埋葬施設出土の石製模造品が組成を異にし、陪塚において剣形が高率で出土する傾向を、祭祀遺跡との関係において考えるべき、つまり、陪塚出土の石製模造品は、「墳墓内のまつり」と「狭義の神祭り」の中間的性格を示すことを指摘した(杉山1972)。杉山が考察した時点では好資料に恵まれず、具体的に検討されることはなかったが、古墳の周辺から出土する石製模造品等の祭祀遺物は、神明遺跡と三味線塚古墳の事例をも踏まえるなら、村落内の祭祀遺構から出土するそれとより近似した性格を示すと予測される。同時に、その古墳は、村落祭祀に深く関係した村落首長の実体の何がしかを反映している可能性がある。そこで、神明遺跡と三味線塚古墳の事例に関連して、古墳周辺から石製模造品等の祭祀遺物が出土する幾つかの事例を以下に参照し、村落祭祀、村落首長の実体に接近する手がかりとしたい。

### 大足1号墳

三重県松阪市大足1号墳は、全長約24mと推定される前方後方墳で(図4左)、二重口縁壺の出土から、築造時期は古墳時代前期、廻間Ⅲ式後半に求められる。一方、周溝からは築造時期を示す遺物に加えて、TK73型式期前後に相当する手捏ね土器を含む土師器、TK73型式期とTK47型式期の須恵器、石製模造品として、有孔円板2点、剣1点、鉄製品として、長頸鏃、短茎鏃、U字形鋤鋤先が出土している(図4-1~5)\*。

### 草刈3号墳と草刈六之台遺跡

千葉県市原市草刈遺跡に包摂される草刈古墳群は、前期から後期に及ぶ180基以上の古墳から構成される古墳群である。草刈3号墳(図5左)は、径約35mに復原される古墳群中最大規模の円墳の一つで、木棺を直葬した埋葬施設には鉄刀1振りのみが副葬されていた。周溝出土の土器群は、TK73型式期に相当する須恵器

\* 発掘調査は、ごく限られた範囲を対象としたもので、遺物の出土状況を正確に把握することには困難が伴う。出土遺物は、「周溝墓の一部を切る」SK3、第1層、第2層からそれぞれ出土したとされるが、SK3の埋土は、「1号墳周溝第1層と基本的に相違はない」とされ、石製模造品は二重口縁壺と同様、下位の第2層から出土したとされている。このような状況を考慮して、小文においては、型的な判断を優先し、遺物の組成を復元的に把握した。

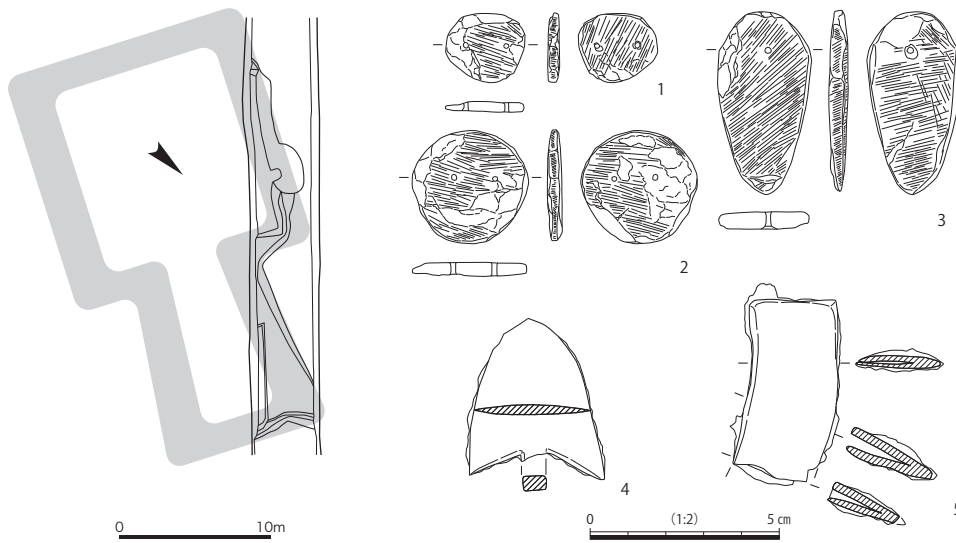


図4 大足1号墳と周溝出土遺物

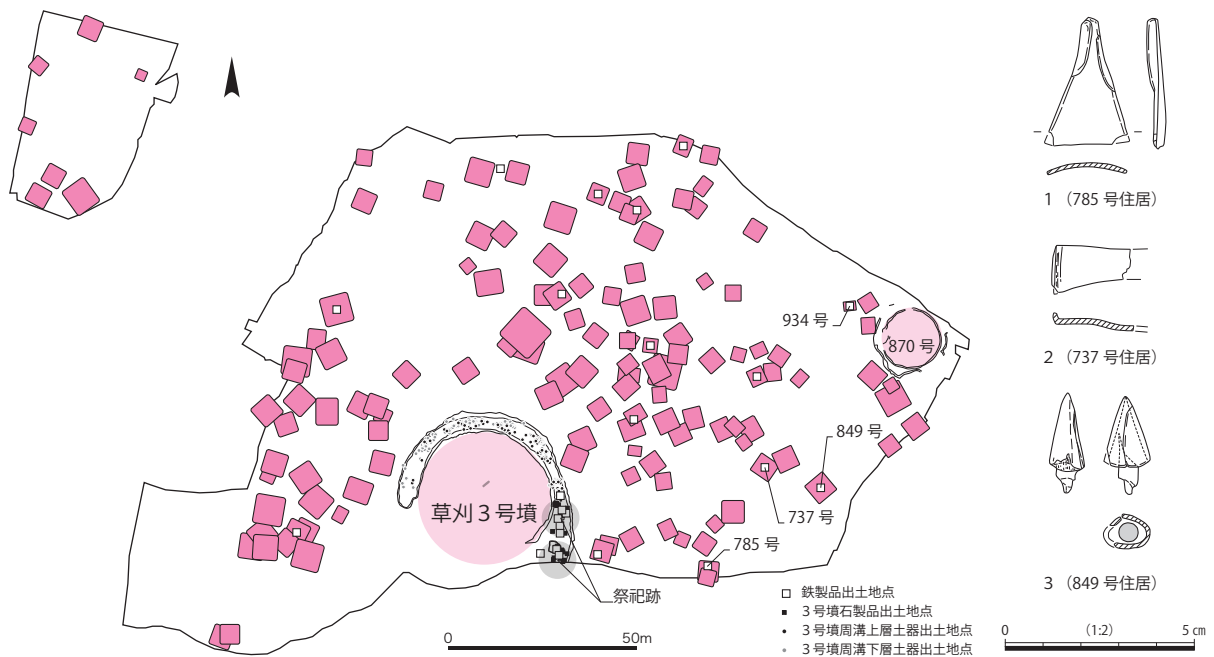


図5 草刈遺跡の遺構と遺物

を含む上層の一群と、それに先行する下層の一群に区分される。なお、周溝上層出土の須恵器には、約500m隔てた草刈遺跡D区、約18m隔てた草刈六之台遺跡内の竪穴住居から出土した須恵器と接合する個体があるという。周溝内には2基の埋葬施設(土壙)、玉類(緑色凝灰岩製管玉2点、滑石製勾玉10点)や滑石製品(有孔円板3点、白玉23点、環状石製品1点)がそれぞれ集中して出土する地点(祭祀跡)が検出されている。これら玉類・滑石製品集中地点

には、鉄鏃等の鉄製品も混在する\*。

草刈六之台遺跡では、古墳時代各時期の竪穴住居が300棟以上検出されている。遺跡からは、鉄製品として、鉄鏃、方形鋤鋤先、斧形・鎌形の小型鉄製農工具(図5-1・2)、小型の石突様の鉄製品(同3)等、石製模造品として、鏡、勾玉、剣、有孔円板等が出土している。斧形の

\* なお、周溝から彫刻文のある腕輪形石製品が出土していること、墳丘規模や周溝出土土器群の量に比して、検出された埋葬施設があまりに貧弱であることから、報告者は別の中心となるべき埋葬施設の存在を推定している。



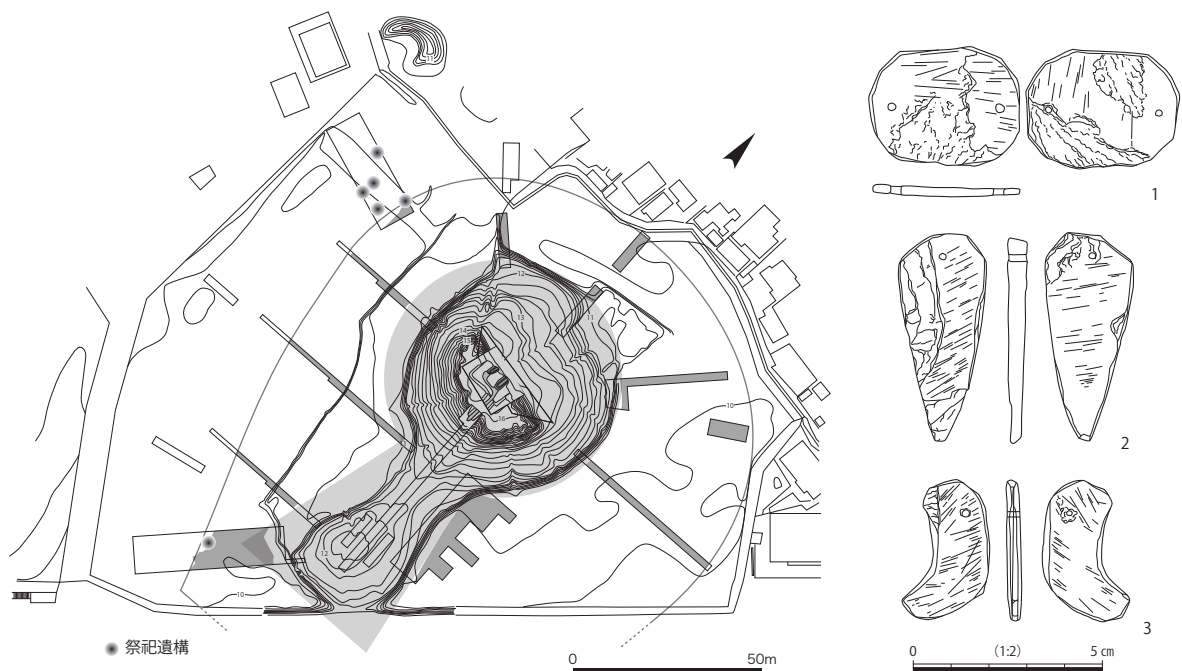


図6 遠見塚古墳と古墳周辺出土遺物

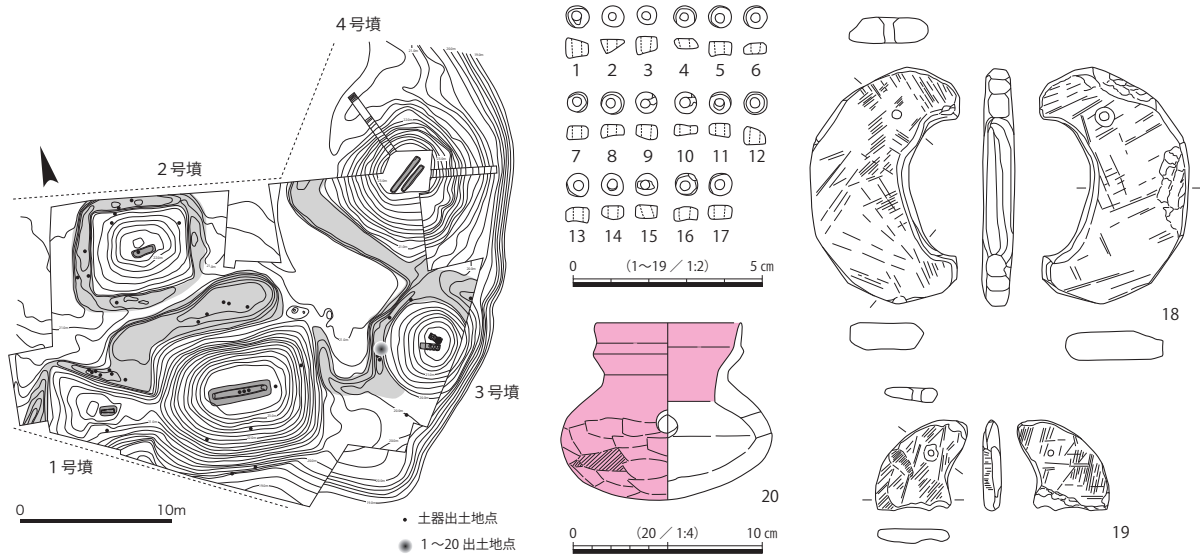


図7 本屋敷3号墳と周溝出土遺物

小型鉄製農工具、小型の石突様の鉄製品は、神明遺跡・三味線塚古墳において出土した一群とよく類似する。また、草刈3号墳と同じく古墳群中で最大規模、径約35mに復原される円墳の草刈1号墳では、木棺を直葬した3基の埋葬施設が検出され、第1主体部に鉄鋌、第2主体部に蕨手刀子や鋸といった注目すべき鉄製品も副葬されている。さらに、同じ水系に属する南二重堀遺跡28号住居においても鉄鋌の出土が確認されている。

#### 遠見塚古墳と南小泉遺跡

宮城県仙台市遠見塚古墳は、古墳時代前期の塩釜式に築造された全長110mの前方後円墳で、(小口側)一辺約11mの墓壇に、長さ8m前後と推定される粘土槨を2基併設する(図6左)。粘土槨内には東槨に碧玉製管玉1点、ガラス小玉4点、竪櫛18点が副葬されていたのみで、西槨に副葬品は何ら認められなかった。一方、古墳の周囲には古墳時代中期の南小泉式・引田式に相当する土器群と、石製模造品勾



玉・剣・有孔円板等(図6-1~3)を使用した祭祀遺構が確認されている。なお、遠見塚古墳の周囲には南小泉遺跡が展開する。遺跡は、南小泉式に集落形成が急速に活発化すると同時に、竪穴住居には竈が付設されるようになるという。

### 本屋敷3号墳

福島県双葉郡浪江町本屋敷古墳群は、前方後方墳1基、方墳2基、円墳1基から構成される古墳群である(図7左)。長径約12.7mの円墳である3号墳は、2基の箱式石棺を埋葬施設とする。2基の石棺は盗掘を受けていたこともあって、棺内から遺物はほとんど出土していないが(1号石棺から小鉄片1点が出土したのみ)、第2号石棺の蓋石上からは、土師器杯13個体が出土した。一方、周堀からは土師器甕と石製模造品勾玉2点が出土した(図7-18~20)。石製模造品は、土師器甕を介して意図的に配置されたような状態で出土し、甕内部からは白玉17点(図7-1~17)が出土した。

### (3) 村落祭祀、村落首長の内実

(1)・(2)を通じて、古墳の周辺において石製模造品が出土する幾つかの事例を例示した。以上の事例に関連する古墳は、遠見塚古墳が大型の前方後円墳である以外、いずれも中小の古墳である。また、これらの古墳の副葬品の質量は一様に乏しく、それは遠見塚古墳も例外ではない。加えて、大足1号墳や草刈3号墳、本屋敷3号墳は、群在する伝統的な墳墓群に埋没する。このような状況は、これらの古墳の被葬者が、自己が帰属する集団から隔離した存在ではなかったことを端的に示す。

これらの古墳の周辺から出土する石製模造品は、有孔円板、剣、勾玉が主で、石製模造品にはしばしば土器群が伴う。このような遺物の組成や使用状況が、集落におけるそれと重なることは明らかである。事実、三味線塚古墳と神明遺跡、草刈3号墳と草刈遺跡の双方で出土する須恵器には接合する個体があることも確認されている。

特に、南小泉遺跡と遠見塚古墳については、集落と古墳の位置関係が神明遺跡と三味線塚古墳に類似するばかりか、集落の消長、居住環境(竈の付設状況、貯蔵穴様の土坑の配置状況)、

古墳の埋葬施設と副葬品の内容、古墳周囲における土器群と石製模造品の使用状況等に類似する要素が多く、双方の遺跡と古墳の形成過程に相通じる背景があったことが想定される。

また、大足1号墳、草刈3号墳、遠見塚古墳については、築造がいずれも古墳時代前期でありながら、古墳の築造後にも古墳の周辺において、土器、石製模造品等を使用する祭祀行為が実施された状況、本屋敷3号墳については、古墳時代前期における前方後方墳と方墳の継続的な築造後に、改めて円墳を築造し、その周囲に土器と石製模造品を配した状況がそれぞれ確認される。このような状況から、これらの古墳(古墳群)が一過性の埋葬のみではなく、集団の祭祀の対象として継続して機能することも少なかつたことが確認される。

つまり、以上の事例からは、古墳、あるいは古墳の被葬者と、村落、村落を構成する集団との緊密な関係が導かれる。それを媒介したのが、石製模造品等の祭祀遺物を使用する伝統的・民俗的な村落祭祀であったろう。また、こうした古墳周辺における祭祀と村落祭祀が交錯するような状況が、伝統的な地域社会、地方の古墳や中小の古墳に温存されていたことも予測される。

一方、神明遺跡では、鉄鋌を素材として製作された非実用の小型の鉄製品(鉄製模造品)が、祭祀遺構SX201や三味線塚古墳の周溝に、導入期の長頸鍬を伴って供されていることも確認された。これに関連して、U字形鍬鋤先が、神明遺跡の竪穴住居と三味線塚古墳の周溝の相互において出土することも注意される。同様な鉄製品の出土状況は、愛媛県伊予郡松前町出作遺跡の祭祀遺構SX01を典型とし、同遺構について村上恭通は、「鍛冶工人による一種の所作儀礼」が執行されたことを想定している(村上1998)。また、非実用の小型の鉄製品(鉄製模造品、籬形鉄器)については、門田誠一や坂靖が、渡来系技術者集団との関連を重視している(門田1999、坂2005)。

つまり、先に伝統的、民俗的と評した村落祭祀には、鉄製の祭祀具を製作することによって、鉄器製作を象徴化するような渡来系技術者集団に端を発する祭祀行為も付随し、それに最新相

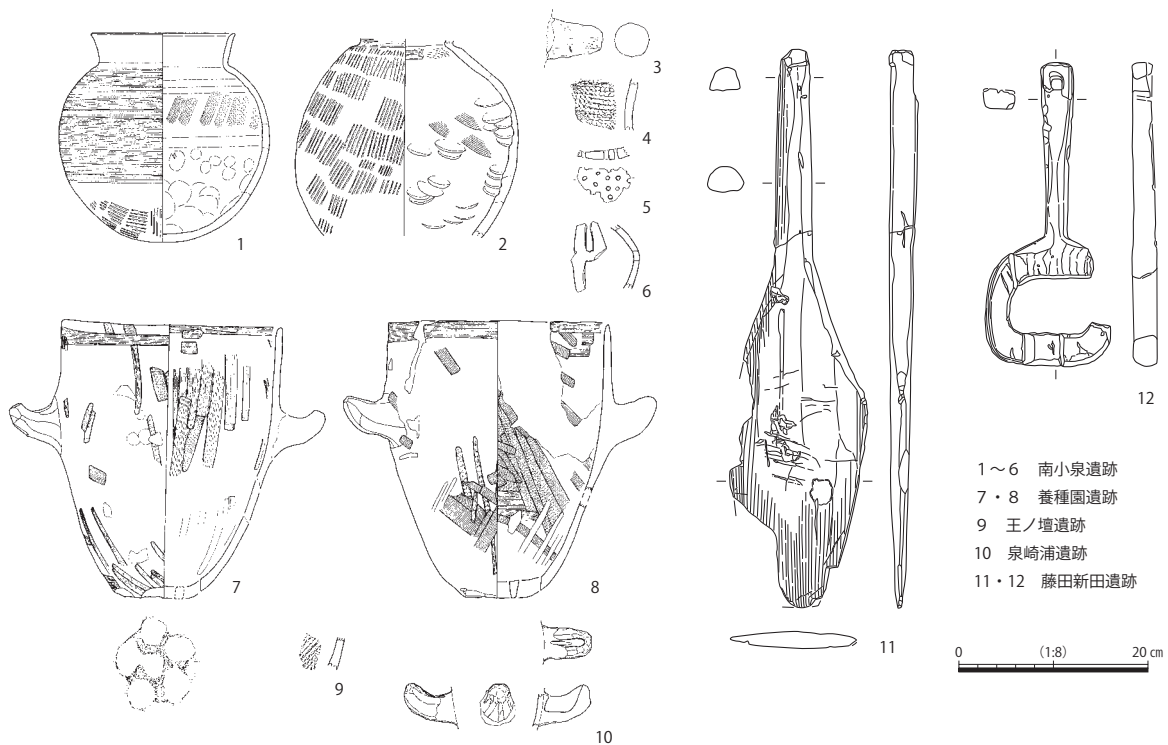


図8 南小泉遺跡とその周辺の渡来系遺物

の武器や農工具も加えられていたこともあったことが知られる。祭祀遺構や古墳の周囲に供された土器群に、初期須恵器が伴出する事例が多いこともそれと無関係ではない。草刈遺跡、大足1号墳等の共通する鉄製品の品目、あるいは初期須恵器についても、同様の背景を想定することも可能であろう。

このとき、神明遺跡の周辺に目を転じると、本川遺跡の導入期の竈、水入遺跡の朝鮮半島系軟質土器、隣接する矢迫遺跡の大壁建物、豊田大塚古墳や荒山1号墳などの竪穴系横口式石室、豊田大塚古墳における胡籬の副葬等、朝鮮半島との関連を示唆する遺構・遺物の分布にも関心が寄せられる。同様に、先に神明遺跡との類似を強調した南小泉遺跡についても、遺跡周辺における渡来系遺物の分布が注目される(図8)。南小泉遺跡の鉄滓と朝鮮半島系土器・初期須恵器(同1~6)、養種園遺跡の多孔甕(同7・8)、王ノ壇遺跡の縄蓆叩きを施した甕(同9)、泉崎浦遺跡の有溝把手(同10)、藤田新田遺跡の木製輪鏡とU字形刃先装着ナスビ形曲柄平鍬(同11・12)等である。

遺跡における渡来系文物としての鉄器の保有は、村落首長を核とした個別経営体としての自立を、鉄器製作を象徴化する行為は、鉄器製作技術の一定の定着と同時に、技術体系と思想が一体として保有されていたことを示唆する。さらにその背景には、地域における朝鮮半島系の文物、技術、生活様式、思想の定着があった。

また、石製模造品と非実用の鉄製品(を製作する行為)が共存する状況については、両者が実用の品目を高次に概念化、象徴化する意識の高揚を共通の背景としつつ、相互に関連していた可能性を提起する。あるいは、そうした意識そのものが、外来思想によって触発された側面も考慮されよう。こうした側面については、杉山林継が、東西日本における祭祀遺物や古墳出土石製模造品の組成の相違を、鉄製品との関係において説明しようとしたこと(杉山1972)、鈴木一有が、朝鮮半島に起源する蕨手刀子と刀子形の石製模造品が、同じ刀子形の祭器として、東西日本で主要分布域を異にすると説いたこと(鈴木2005)など、石製模造品と鉄製品の相互補完の関係に対する視点が参考となる。

## まとめ

かつて、古墳時代村落の研究が展開する過程において、石製模造品は、村落祭祀の研究とも関係しつつ、観念の段階的相違、家父長制的世帯共同体の成立を展望する指標の一つとして、重要な位置を占めていた。その後、多くの個別実証的な分析が提示されるようになった反面、従来の視角は十分に継承されなかった。本文は、こうした問題意識に端を発したもので、イデオロギー的な側面に対する前提にも配慮しつつ、改めて個別実証的な事例を通じて、村落、祭祀、首長の諸関係の内実を素描した。

結果、石製模造品を出土する地方の古墳、あるいは中小の古墳とそれと関係が深い村落に、伝統的・民俗的イデオロギー、鉄器生産と鉄製農工具の所有、地域開発が緊密に相関していた状況を確認した。この状況は、継体朝期に箭括氏麻多智が、自然神である夜刀神を村落の信仰の中心に据え、中規模開発を主導したことを伝える伝承に重なる部分も多い。とするなら、この伝承には、村落における自然神を対象とした伝統的・民俗的な祭祀を観念的支柱としつつ、地域開発を主導した継体朝期以前の村落首長の実像が象徴的に仮託されているとも推測される。また、伝統的な農耕祭祀に、外来の鉄器生産を観念化する思想、鉄製品や須恵器等の消費材をも付加されていた状況から、開発を主導した村落首長は、共同体の宗教的権威を体現しながらも、各種の生産や消費材の流通に関与し、私的な経済的基盤を構築していたことが予測される。また、実用品を高次に概念化する意識そのものについては、外来思想によって触発された側面を考慮する必要があることも述べた。

ここで確認した諸様相の普遍性、地域性を追求する作業が残されてはいるものの、村落にお

ける石製模造品によって象徴されるイデオロギーは、生産力の向上、鉄器保有の進展、家父長制的世帯共同体の成立等を背景として段階的に克服されたのではなく、むしろそれらと同調していた場合も少なくなかったと考えられる。村落における石製模造品は、村落祭祀そのものの伝統が温存される一方、社会状況や集団関係の変化、生産力の向上に応じて、外来思想にも触発されつつ、村落祭祀が高次化、複雑化する過程において用意されたものであった。

そして、地方における生産の向上と多様化、それに伴う新興層の拡大によって、在地社会における村落祭祀はより複雑化し、その重要性も高まったに相違ない。その一方、国家が成熟する過程で、複雑化した村落祭祀は整理統合の対象となったであろう。ここに、古墳時代村落において、地域開発の触媒としても機能した村落祭祀は、「氏寺に対立すべきものとして」政治的に統制され（河音 1970）、形骸化することになる。この脈絡において、民間信仰や地方的霊格は王権に組み入れられ（松前 1974）、伝統的な農耕祭祀は律令国家の祈年祭に再構成される（義江 1972）。また、民俗的祭祀に端を発し、石製模造品として村落祭祀に顕在化した三種の宝器は、三種の神宝として王権に定着する（岩崎 1987）。一方、外来思想に端を発する非実用の鉄製品を製作する祭祀も、（三種の）宝器の儀礼と関係を保持しつつ、王権の儀礼の一端を構成するようになる（早野 2008）\*。石製模造品は村落祭祀が発展し、形骸化するその端緒として、改めてその位置が確かめられるのである。

\* 『古語拾遺』の天石屋戸段の記述には鏡と玉を使用する儀礼と、鍛冶を職掌とする神格が刀や斧、鉄鐸を製作する行為が象徴的に共存する。ただし、『古事記』を含めて）天石屋戸段には、鏡と玉の二者が記述されるのみで、劍の記述がない。これについては、前後の脈絡と辻褄を合わせるため、編纂時に劍の記述を意識的に削除したとする松前健の考証がある（松前 1974）。岩崎卓也もこれに従い、「三種の宝器を賢木に下げるといふ所作は、当時ごく常識的なことと意識されていたことの一つ」であると述べている（岩崎 1987）。

## 参考文献

- 岩崎卓也 1986 「古墳時代祭祀の一側面」『史叢』第 36 号 日本大学史学会  
岩崎卓也 1987 「三種の神宝」の周辺』『比較考古学試論』雄山閣出版  
大町健 1986 『日本古代の国家と在地首長制』校倉書房  
岡田精司 1970 『古代王権の祭祀と神話』塙書房  
河音能平 1970 「国風文化の歴史的位置」『講座日本史』第 2 巻 東京大学出版会  
小出義治 1966 「祭祀」『日本の考古学Ⅴ 古墳時代下』河出書房  
後神泉 1993 「5～6 世紀における集落祭祀の様相—石製模造品からみた関東地方の集落祭祀—」『古代文化』第 45 巻第 8 号



財団法人古代学協会

- 桜井秀雄 1990 「古墳時代の祭祀をめぐる一考察」『信濃』第42巻第12号 信濃史学会  
白石太一郎 1985 「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館  
杉山林継 1972 「祭と葬の分化—石製模造遺物を中心として—」『国学院大学日本文化研究所紀要』第29輯 国学院大学日本文化研究所  
鈴木一有 2005 「蕨手刀子の盛衰」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室  
鶴間正昭 2007 「祭祀遺構にみる土器集積」『原始・古代日本の祭祀』同成社  
高橋一夫 1971 「石製模造品出土の住居址とその性格」『考古学研究』第18巻第3号 考古学研究会  
高橋一夫 1975 「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代研究2』校倉書房  
高橋誠 1999 「土器集積型祭祀の意味するもの」『南羽鳥遺跡群Ⅲ—中軸第1遺跡F地点—』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第145集 財団法人印旛郡市文化財センター  
出原恵三 1990 「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀—」『考古学研究』第36巻第4号  
寺沢知子 1986 「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』第16号 雄山閣出版  
沼田武彦 1979 「古代村落祭祀の史的位置」『論究日本古代史』学生社  
早野浩二 2006 「一県内遺構・遺物集成—石製模造品」『研究紀要』第7号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター  
早野浩二 2008 「古墳時代の鉄鐸について」『研究紀要』第9号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター  
原島礼二 1971 「日本古代社会論—大家族の成立と発展に関する覚書—」『現代歴史学の課題 上』青木書店  
坂靖 2005 「小型鉄製農具の系譜—ミニチュア農具再考—」『樞原考古学研究所紀要 考古学論攷』第28冊 奈良県立橿原考古学研究所  
松前健 1974 『日本の神々』中公新書  
村上恭通 1998 『倭人と鉄の考古学』青木書店  
門田誠一 1999 「古墳時代の鉄製模型農具と渡来系集団」『史学論集—佛教学部文学部史学科創設30周年記念—』佛教学部文学部史学科創設30周年記念論文集刊行会  
義江彰夫 1972 「律令制下の村落祭祀と公出挙制」『歴史学研究』No.380 歴史学研究会 青木書店  
吉田晶 1980 『日本古代村落史序説』塙書房

## 遺跡文献

- [宮城県] 泉崎浦遺跡：主浜光朗他 1988 『泉崎浦遺跡』仙台市文化財調査報告書第119集 仙台市教育委員会  
王ノ壇遺跡：小川淳一・高橋綾子 2000 『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書第249集 仙台市教育委員会  
遠見塚古墳：結城慎一・工藤哲司 1979 『史跡遠見塚古墳 昭和53年度環境整備予備調査概報』仙台市文化財調査報告書第15集 仙台市教育委員会／結城慎一・工藤哲司 1983 『史跡遠見塚古墳 昭和57年度環境整備予備調査概報』仙台市文化財調査報告書第48集 仙台市教育委員会／藤沢敦 1995 「遠見塚古墳」『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市  
藤田新田遺跡：岩見和泰他 1994 『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第163集 宮城県教育委員会  
南小泉遺跡：佐藤洋他 1987 『南小泉遺跡 第14次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第109集 仙台市教育委員会／佐藤洋他 1990 『南小泉遺跡 第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集 仙台市教育委員会／金森安孝・稲葉俊一 1992 『南小泉遺跡 第21次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集 仙台市教育委員会／工藤信一郎他 1998 『南小泉遺跡 第30・31次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第226集 仙台市教育委員会／工藤哲司 1995 「南小泉遺跡」『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市  
養種園遺跡：佐藤洋 1997 『養種園遺跡』仙台市文化財調査報告書第214集 仙台市教育委員会  
[福島県] 本屋敷3号墳：伊藤玄三他 1985 『本屋敷古墳群の研究』法政大学文学部考古学研究室  
[千葉県] 草刈1号墳：田井知二 1997 『千原台ニュータウン7—草刈1号墳—』千葉県文化財センター調査報告第295集 財団法人千葉県文化財センター  
草刈六之台遺跡（草刈3号墳）：白井久美子他 1994 『千原台ニュータウンVI—草刈六之台遺跡—』千葉県文化財センター調査報告第241集 財団法人千葉県文化財センター  
南二重堀遺跡：伊藤智樹他 1983 『千葉東南部ニュータウン12—南二重堀遺跡—』財団法人千葉県文化財センター  
[愛知県] 荒山1号墳：宮腰健司他 2004 『荒山古墳群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第128集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター  
三味線塚古墳：三田敦司他 2001 『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 豊田市教育委員会  
神明遺跡：森泰通他 1996 『神明遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 豊田市教育委員会／森泰通他 2001 『神明遺跡II』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 豊田市教育委員会  
豊田大塚古墳：久永春男他 1966 『豊田大塚古墳発掘調査報告書』豊田市教育委員会／森泰通 2005 「豊田大塚古墳」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県  
本川遺跡：樋上昇他 2003 『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第100集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター  
水入遺跡：永井邦仁他 2005 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第108集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター  
矢迫遺跡：鈴木正貴他 2002 『矢迫遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第102集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター  
[三重県] 大足1号墳：小林秀 1990 「大足遺跡」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財調査報告92-2 三重県埋蔵文化財センター  
[愛媛県] 出作遺跡：相田則美他 1993 『出作遺跡I』松前町教育委員会